

## 令和元年度 愛知文教大学外部評価委員会議 記録

1. 日時 令和元年8月6日(火) 午後1時30分から午後2時47分
2. 場所 愛知文教大学 2階大会議室(控室 2階応接室)
3. 出席者  
伊藤加代子外部評価委員、岩本 淳外部評価委員  
学長、大学院研究科長、人文学部長、学生部長、教務部長、自己点検・評価委員長、FD 委員長、事務局長、事務局次長、IR推進室長、教務課長、総務課長
4. 内容と時間配分(司会・自己点検・評価委員長)

○ 開会の言葉(出席者の紹介を含む) 〈13:30〜〉自己点検・評価委員長

早川自己点検評価委員長より開会の宣言、列席者紹介がなされた。

○ 学長あいさつ 〈13:32〜〉富田学長

大学は7年に一度、文部科学大臣の認証を受けた大学機関別認証機関を受けねばならない。そのための自己点検評価書を毎年作成する。本学は2017年に受審、次は2021年に受審予定である。ここ2年、入学定員を充足し、収容定員充足に向かっている。良い学生、小牧市に役立つ学生を輩出したいと考えている。今日はそのための説明をするよい機会である。これまで以上に本学を理解いただき、厳しい評価を頂きたい。

○ 自己点検評価の意義について 〈13:15〜〉江口人文学部長

自己点検評価とは、大学の教育研究活動・組織運営施設設備について自ら点検し、優れた点、また悪い点を点検・評価し改善につなげていくことである。

自己点検評価活動は学校教育法の中で定められており、またそれを公表することが定められているが、本学は社会的責任を果たす目的で自主的かつ継続的に行っている。忌憚のない意見をお願いしたい。

各基準5分以内の概要説明及び外部評価委員からの質疑応答(計40分以内)。質疑応答には各項目の主たる執筆者など詳しい者が応じる。

基準1(遠藤大学院研究科長) 〈13:37〜〉

基準1は理念的な部分。それが教育の方針にどう反映しているかを示している。大学の使命・目的、人文学部の教育目的、同大学院を説明。学則にも明記されている。建学の精神を現代に読み替えて作成されている。

また、これらは理事会、全教職員、大学ホームページ等、学内外に対して広く周知されている。そして、これらを具体的にどのように教育活動に取り入れていくかといったことが、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーに規定され、会議体とともに組織的に実施されている。

#### 【質疑応答】

岩本委員：「逆転力教育」はわかりやすい。PRの方法は重要である。平成25年に再評価を受けてからの対応を少し詳しくご説明いただきたい。

富田学長：再評価がうまくいかなかった理由は定員充足率であった。教員の質、資格取得、論文等といった部分を充実させた。

岩本委員：自己点検評価書19ページ本文3行目「さまざまな方法」とは具体的にどういうことか。

遠藤研究科長：ホームページでの公表、学生便覧での周知である。

江口学部長：非常勤の教員にも周知している。新任の専任教職員には4月に新任研修会を行い、そこで周知している。

#### 基準2（山本事務局次長）〈1351〜〉

「志願者数の増加」を大命題とし、大学の認知度向上、なかでも受験校として選んでもらえる体制を取った。高等学校訪問、説明の機会、大学展等、高校生に直接触れる機会を増加させた。また紙媒体に加え、インターネットやSNSを活用し、高校生とその親に対しての認知度をアップさせた。また試験制度を見直した。「逆転力教育」というキーワードをもとに、受験校として取り上げられるような方策を取った。

留学生は多様化・グローバル化を学生が学内で体験できる場として必要。入学者のフォローアップとして、入学者全員にヒアリング、学長昼食会を開催。カリキュラムの改革、施設の改修を進めるPDCAを確立している。

#### 【質疑応答】

伊藤委員：少子化の中、努力されている姿が見える。自己点検評価書28ページ下段「オープンキャンパスの内容の見直し」を具体的にご説明いただきたい。

山本事務局次長：本学の示したい(1)英語(2)中国語(3)日本文化(4)教職をそれぞれ体験授業、学生の体験談の発表として実施。高校生に実体験を伝える工夫改善を行った。また留学生もオープンキャンパスに参加し、語学ラウンジのトレーニングを体感型で高校生に伝えている。

#### 基準3（辻教務部長）〈1401〜〉

3つの観点より説明。

(1) 教育目標とその遂行：日本文化の教養と英語・中国語の運用能力の獲得により多文化共生社会において主体的に活動可能な人材の育成を目標とする。記載のプログラム・コースは、いずれも実践的な理論（インプット）と実技（アウトプット）をバランスよく設置していることが特徴。日本文化は理論と実技、小牧学では

実務家教員によるフィールドワーク、語学では1年次に語学研修、語学実践ラウンジの設置、キャリア科目は卒業後につながる実務家教員による講義やプレゼンテーションなどの技術を学修する。3,4年次でアカデミアゼミにおいて自主的な研究調査活動と発表を行わせ、学びの集大成としている。

- (2) 判定基準に基づく厳正な評価：評価基準を明確に示す。今年度より再試験の対象としない「E」の判定基準を増設し、より厳密な評価を期している。着実に教育内容を理解させ、「D」判定には再試験を受けさせる制度とし、「頑張れば評価してもらえ」システムとした。
- (3) 学修の質保証とその客観性と可視化の重視：客観的な学修評価。TOEIC、HSK、日本語能力試験などの検定試験を利用。単位や目標達成型奨学金の対象とし、外部から見てもわかる質保証を行う。

#### 【質疑応答】

伊藤委員：日本語教員養成コースの現状はどうか。

辻教務部長：受講生はおもに留学生であり、留学生が帰国後に日本語教員となる際に有効であったという事例を把握している。

伊藤委員：日本語教員が不足している現在、期待できる分野であろう。授業調査アンケートを学生にフィードバックしている点について、勇気がいることと思われる。評価できる。

#### 基準4（西口FD委員長）〈14:11〜〉

4つの観点より説明。

- (1) 学長のリーダーシップが発揮されている。
- (2) 専任教員数・教授数は大学設置基準を満たしている。専任教員は6グループに配置されており、職能開発、授業公開、FD、授業アンケート等、改革中である。
- (3) SD活動は内外で実施し、情報を共有している。
- (4) 研究支援：研究倫理の規程整備を行っている。外部資金の獲得サポートを進めている。

#### 【質疑応答】

伊藤委員：学長のリーダーシップは大切であるが、現場の声を下から吸い上げる仕組みはどうか。

富田学長：全教職員と面談を行っている。

伊藤委員：研究支援に関し、自己点検評価書73ページに「24時間いつでも使用可能な研究環境を整備」と記されている。昨今の働き方改革とは逆行しているがどうか。

遠藤研究科長：教員は裁量労働制である。仕事かどうか割り切れない部分は多いが、これは全国的な問題でもあろう。

#### 基準5（鈴木事務局長）〈14:18〜〉

4つの観点より説明。

- (1) 経営の規律と誠実性の維持：情報公開は私立学校法で決まっている。補助金の加算対象でもある。

- (2) 使命・目的の実現への継続的努力：大学は寄付行為に則り運営を行っている。理事会等には大学から学長・事務局長の2名が出席しており、大学の意見は理事会へ適切に反映されている。また平成28年度より常任理事会も開催され、理事長が大学の現状を見る事が出来るようになった。
- (3) 環境保全、人権・安全への配慮：全学禁煙を検討中である。環境整備としてはウッドデッキを設置する。ハラスメント対策は周知徹底され、規程の改正も行っている。安全面は外部委託を行い、防災・環境整備・衛生・エレベーター等の法令点検も行っている。
- (4) 財務：負債の少ない学校法人である。補助金や科研費等の外部資金の導入等により、経営改善に向けて努力を行っている。監査は監事2名、公認会計士、内部監査の意見交換等を充実させている。

【質疑応答】

なし。

基準6 (稲垣 IR 推進室長) (14:26～)

昨年度より認証評価に内部質保証という新しい基準が導入された。これは学生が、大学が示した水準に到達して卒業しているかという点にかかわる基準である。本学では学長のリーダーシップのもと、自己点検評価書を毎年冊子として作成し、外部評価委員の意見を受け入れてPDCAサイクルを回している。また、満足度調査等の各種学生アンケートを実施し、アフターケアを外部に公表するための対応を行っている。監査は財務だけでなく、教学面でも必要となってきた。結果、定員充足、ICT化の課題が見えてきている。

【質疑応答】

なし。

独自基準 (富田学長) (14:33～)

本学では学長が地域連携センター長を兼務し、地元との連携を密にしている。小牧市とは国際交流、教職課程等で協定を締結し、地域連携、生涯学習、日本語教育、大学祭等で活動を行っている。またグラウンド、図書館等を開放しており、地域に開かれた愛される大学を目指している。

【質疑応答】

伊藤委員：連携を結ぶだけでなく、実際に施設の利用、業務の実施、講師の派遣、学生の派遣等の貢献をしていただいております、感謝しています。

特記事項 (江口人文学部長) (14:37～)

特記事項は大学の特色を簡潔に記した部分である。ポイントは次の2点である。

- (1) 国際交流：1年次学生の語学研修や留学生・交換留学生・科目等履修生を組織的に受け入れている。

② 地域連携と社会貢献：文化財啓発事業等への参加。小牧市以外の近隣自治体とも実施している。

【質疑応答】

岩本委員：貴学の特色は確かにこの 2 つであろう。今後この項目に多くのことが書けるような大学にしていきたい。

5. 講評等〈5分程度〉外部評価員〈14:43〜〉

伊藤委員：あらためて愛知文教大学の取り組みの姿勢が伝わった。留学生・日本人学生の間には文化の違いがある。身体的、メンタル面、施設面等でケアにぜひ力を入れて頂きたい。

岩本委員：学長のリーダーシップ、教職員からの意見の吸い上げ、学生への学長室開放等、風通しの良い大学である印象を受けた。大変良いと感じた。自己点検評価書に文字の欠落等があるので、公開の際には修正をお願いしたい。小牧市民文化財団の立場としては、愛知文教大学の強みを生かし、市民また行政にとってプラスになるような活動をしていただきたいと思う。

6. 学長謝辞〈1分〉富田学長〈14:46〜〉

教員免許更新講習、小牧文化財団の大学連携市民講座等で社会貢献、協力ができると思う。今後とも宜しくお願い申し上げたい。

7. 閉会の言葉〈1分〉早川自己点検・評価委員長〈14:47〉

閉会の宣言

以上